



埼玉の社叢

かみのむら
上之村神社

熊谷市上之一六

当所は、かつて騎西領成田郷と呼ばれ、中世・戦国時代と忍城主であった成田氏の本貫地であった。上之村の地名も、成田上村と称していたのを成田氏が忍に移ったあと、「成田」の呼び名をはばかって「御上之村」と呼んでいたが、天正の頃から「上之村」と称されるようになった。

当社は、明治二年（一八六九）に現在の「上之村神社」に改称するまでは、「久伊豆大明神」と、「雷電大権現（現撰社、大雷神社）」と呼ばれていた。ただし、通称では「雷電様」と呼ばれるほど、古くから大雷神社に対する病魔・雨乞い・作神の信仰があり、県北を中心に雷電講が組織されている。

また、応永年中（一三九四～一四二八）、成田家時が葦毛の馬に乗り、館の東方の森にある祠の前を通り過ぎようとしたところ、馬が急にはねて落馬した。これまで戦場においても落馬したことがなく、馬も名馬であったので、あるいは神の祟りかと思いい、この祠の由緒を古老に尋ねたところ、正面は久伊豆大明神、東向きは雷電大権現、祭神の別雷命は葦毛の駒に乗られるので、氏子が葦毛の馬に乗れば神罰があり、他国の者でも神前を通れば必ず咎を受けると答えた。家時は、神威を恐れて、この葦毛の馬を神馬として奉納し、社殿を造らせ、神社の前に土塁を築き、直接、社前を馬で通れないようにしたという。

今も境内正面を遮る形で、往時のままに五十以上の土塁（写真左）が残る。かつてはクロマツの並木となっていたが、今は数本の名残を残すのみとなっている。

『増補忍名所図会』天保六年（一八三五）の「久伊豆神社」の項には、「松杉繁茂して森然たる神祠なり」と記されているが、かつてのような大木は減ったといいながらも、かなり離れたところからでも当社の大きな杜が認識できる。

約一・二ハルの林相は、クロマツ・スギ・クスノキで構成され、ほかにもケヤキ・シイなど多くの樹種も見られる。